

My First Stage

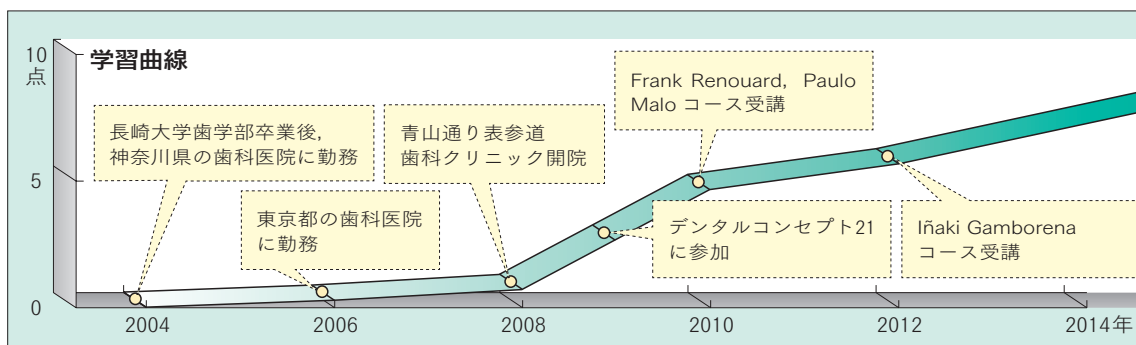
対合にマウスピース矯正を用いた前歯部審美治療

大多良俊光

キーワード：審美治療，AsoAligner®，MTM，アンテリアガイダンス

臨床経験年数

臨床経験年数 9 年。2004 年長崎大学歯学部卒業後，神奈川県 の 歯 科 医 院 に 勤 務。同 時 期 に 予 防 歯 科 の 権 威 で あ る イ エ テ ボ リ 大 学 の Per Axelsson 博 士 に 師 事。2006 年 以 来 東 京 都 の 歯 科 医 院 に 勤 務 し，審美歯科に従事。2008 年渋谷区神宮前にて青山通り表参道歯科クリニック開院。その後，三好敬三先生，中村社綱先生のコースを受講し，デンタルコンセプト21に参加。同グループでインプラント治療を学ぶ。2010 年 Frank Renouard，2010 年 Paulo Malo，2011 年～2013 年 Iñaki Gamborena コース受講。2011 年 OJ ミッドウインター，2012・2013 年 ORE で講演。デンタルコンセプト21会員，OJ 正会員，EAO アクティブメンバー，from NAGASAKI 主宰。



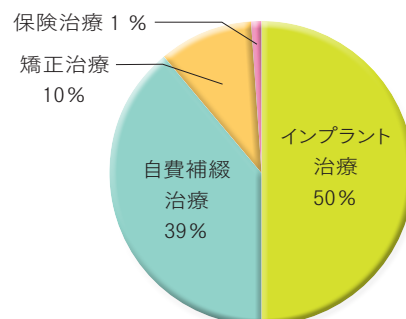
診療方針

偉大な先人たちの科学的根拠に基づいた歯科臨床を踏襲しつつ，longevity や mobility まで考慮した質の高い治療を実践する。

日々の臨床

青山・表参道という立地から20代，30代を中心とした女性の患者が多数である。診療内容としては補綴治療を中心とした審美修復がもっとも多く，次いで部分矯正や全顎的矯正，その他，審美領域におけるインプラント治療などを中心に診療している。

【日常臨床で頻度の多い割合】



企画趣旨

患者の主訴や口腔内の状態など、その背景はさまざまであるが、「1 歯の治療にこだわること」、それがすべての基本であり、はじめの 1 歩といえよう。

本欄では、患者の背景を踏まえつつ 1 歯に対する治療にこだわる若手歯科医師に、どのように診査・診断し、治療計画を立て、治療結果を得たのか、その患者と信頼関係を築くまでの過程を自己評価も含めて提示いただく。また、師匠や先輩歯科医師からのメッセージもあわせて掲載。

longevity や mobility まで考慮した
質の高い治療の実践

大多良俊光

Toshimitsu Ootara

青山通り表参道歯科クリニック
〒150-0001 東京都渋谷区神宮前5-46-12 長壁
ビル1F・2F



初診時の状態

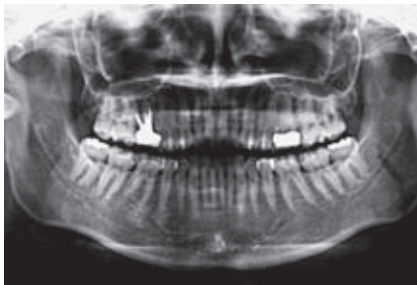


図 1a, b 初診時のパノラマエックス線写真および口腔内正面観。白歯部に補綴物がセットされているが、プラークコントロールは良好で、骨レベルも安定しており、歯周組織などに問題はない。



図 2 1]と1]のカップリングに問題があり、アンテリアガイダンスの不良が認められる。

患者のバックグラウンド

- 患者：31歳，女性。
- 主訴：虫歯の治療と審美的な改善を希望。とくに歯並びや歯の形が気になっている。
- 歯科既往：カリエスリスクは高くなく、う蝕を数歯治療。

- バックグラウンド：全身的な既往歴はなく、喫煙の習慣もない。歯磨きが朝・昼・夕方・就寝前と健康意識が強い。また、問診の際に審美的に高いレベルの治療を望んでいることが強く感じられた。

診査・診断，治療計画

- どのように診査を進め、診断したか：全類的に歯周組織の状態に問題はなく、プラークコントロールも良好である。上下顎前歯部の不正咬合については健全な天然歯であることから矯正治療が優先されると考えたが、患者の主訴として歯並びだけでなく歯の形態も改善したいとの希望からワックスアップなどによって患者が求める治療のゴールと治療ステップについて検討していくこととした。

- 診査結果および治療計画説明時の患者の反応：第一の選択として上下顎の矯正治療による審美修復を提案した。この提案に対して患者は治療期間および矯正装

置の装着について拒否反応を示し、また、上顎前歯部の歯冠形態の改善まで希望した。つぎに、上顎前歯部の補綴治療を計画し、再度患者に説明を行った。ワッ

図 3 上顎前歯部の補綴治療による審美修復、下顎の矯正治療を想定したワックスアップ。



My First Stage

クスアップによる歯冠形態で納得が得られたため、治療を進めていくこととした。なお、下顎についてはアンテリアガイダンスの重要性についていねいに説明し、マウスピースタイプの部分矯正治療を受け入れてもらえた。

■治療の実際：上顎に関しては、顔貌、口腔内の状況から歯科技工士と相談してプロビジョナルレストレーションを製作し、セットした。下顎に関しては、Aso-

Aligner® による歯列矯正をスタートした。1回目のプロビジョナルレストレーションは、歯軸が少し不良であったため、2回目のプロビジョナルレストレーションをセットし、最終補綴への評価とした。そして、上顎を2回目のプロビジョナルレストレーション、下顎をAsoAligner® の状態で、アンテリアガイダンスの調整を行っていき、適正になった段階で上顎は最終補綴物製作、下顎は保定へと治療を進めていった。

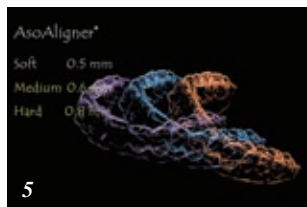


図4 術前に中切歯の歯軸、および3+3に審美的形態不良がみられたため、3+3にガイダンスを与え、模型と顔貌から判断した1回目のプロビジョナルレストレーションをセットした。

図5 下顎は、可撤式の矯正装置 AsoAligner® を用いて矯正を行った。soft で初期の移動、medium, hard で活性化を行うマウスピース矯正装置である。



図6a, b 1回目のプロビジョナルレストレーションを基に顔貌やリップとマッチさせるために再評価を行い、歯科技工士と相談し、2回目のプロビジョナルレストレーションの製作を行った。また、1のガイダンス量は、対合の1の矯正後を予測して決定した。



図7 2回目のプロビジョナルレストレーションセット時の口腔内写真。アンテリアガイダンス、犬歯ガイダンスは適正にとれたが、その分歯冠が長くなっている。

図8 2回目のプロビジョナルレストレーションを口腔内、顔貌、リップラインから歯科技工士と相談し、最終補綴物を製作。

図9 支台歯形成時。ポーセレン築盛のため、カットバックに必要な分だけ形成し、隅角は、応力が集中しない丸みのある形態とした。



図10a~c 3+3に3MのLAVAにvintage Zrを築盛したオールセラミッククラウンをセット。下顎を矯正したことにより、適正なアンテリアガイダンスが確立されている。



図 11a~c 最終補綴物装着後4年経過時の口腔内写真。とくにめだった歯肉退縮や補綴物の破折もなく、良好な口腔内の状態を維持している。

治療結果の自己評価と患者の様子

■自己評価：1回目のプロビジョナルレストレーション製作時に、単純な感覚で形態を決定していたが、John Kois のコイスデントフェイシャルアナライザーなどを用い、製作しなかったのが落ち度であり、また、矯正治療後の保定へと移行する期間が少し早かったように思われる。

■患者との信頼関係が築けたと感じた瞬間：永続性のために、下顎の矯正治療が重要であることをていねいに説明したことで、当初は上顎だけの審美修復を希望

されていたにもかかわらず、下顎の矯正治療も受け入れてもらったとき。

■今後の課題：今回の症例では、開業してすぐということもあったが、全体的に治療の進め方が早かったように思われる。今後は、プロビジョナルレストレーションで経過をみる期間を必要分とり、また、臼歯部を含めたガイダンスをつねに考え、患者の口腔内永続性に貢献していきたい。

先輩 Dr. からのメッセージ



三好敬三

1986年 昭和大学歯学部卒業
1987年 神奈川県川崎市三好歯科医院開業
1999年 東京都世田谷区インプラントセンター21開業
2003年 東京都世田谷区三好デンタルクリニック開業
OJ 副会長・常任理事，デンタルコンセプト21会長，昭和大学歯学部顎口腔疾患制御外科学教室兼任講師，EAO 会員，日本口

腔インプラント学会専門医，ノーベル・バイオケア・インストラクター

〔治療方針〕

MI の考え方を基本とし，より低侵襲で安全・確実なインプラント治療を心掛けている。

▶ケースから感じること

本症例の最終補綴物装着時の口腔内をみると，患者から求められた高い審美修復治療ができています。初診時にみられた前歯部の不正咬合も上顎の補綴治療だけでなく，下顎の矯正治療によって改善されていることから，長期的に安定した予後も期待できると思われる。

しかしながら，本症例で審美修復をした歯が健全な天然歯であることから，治療前のワックスアップによる治療計画を綿密に行い，患者と相談しながら可能な限り天然歯を治療しない，あるいは，ラミネートベニアなどの MI コンセプトに基づいた，患者に対して，より優しい治療法の選択も考えられる。

▶さらに成長してもらうためのメッセージ

大多良先生のクリニックは，表参道という場所柄もあると思われるが，審美治療を目的とした患者が多いと聞いている。そのため，同世代の先生たちと比較しても審美修復の症例が多く，また，クオリティの高い補綴治療を実践している。

今後さらに成長してもらうために，このような審美治療を天然歯だけでなくインプラント治療などへも応用し，また，矯正治療や咬合などの分野についてもいっそうの研鑽を積み，審美性だけでなく永続性をもった質の高い歯科臨床を続けてほしい。

本欄に対するご意見・ご質問は，本誌編集部：edit-q@quint-j.co.jp までお寄せください。